

三浦兄弟（3）

三浦泰年

集英社インターナショナル
ウェブ立ち読み

第3章 カズのブラジル、僕のブラジル

僕の弟は「カズ」。誰もが知っている「カズ」だ。あまりにも有名なため、周りからはよく「カズのお兄ちゃんだよ!」と紹介される。特に気にはしていないが、僕からすれば「カズの兄が僕」ではなく「僕の弟がカズ」だと思っている。

といっても、僕らはブラジルに行けば、いまだに「納谷の息子」でしかない。今でこそ「納谷の息子」カズだと知る人も増えたが、ブラジルと日本のサッカーを繋ぐ架け橋となり貢献した親父は、ブラジルサッカー界では今でも特別な存在だからだ。ただ、その親父でさえ、日本では「カズの父」と呼ばれるようになった。そのことはカズの日本での知名度を示している。

カズもヤスもブラジルでは「納谷の息子」

ブラジルサッカー界では特別な存在として知られる父、納谷宣雄は僕にとって、一番尊敬できる人物であり、一番尊敬できない人物だ。

子ども時代の僕は、お袋をよく泣かせていた親父のことをいつも「なんなんだ、この人は?!」

と思つていたし、あまり好きでもなかったが、大人になった今は、表現の仕方が人とは少し違ふし、「愛情の示し方が下手だよな」と思うことも多いけど、一番僕らのことを愛してくれていて、子どものためなら平気で自分の命を投げ出せる、そんな親父だと思つている。

親父の父、つまり僕にとっての祖父は、母校・静岡高校の野球部に所属していて、過去にはOB会長をやつていたと聞いている。したがつて祖父は、親父が子どもの頃、野球をやらせたかつたらしく、そのため、いつも親父は祖父の目をくますためにバットとグローブを持つて学校に行き、サッカーをやつていたらしい。つまりは僕と同じサッカー少年だったということだろう。

三男一女の次男で、一番の悪ガキだった親父。子どもの頃に祖父母が離婚をして姓が大石から納谷に変わつても、静岡ではその悪ガキぶりが有名すぎて、親父の名を知らない人はいなかつたほどだったようだ。

ただ、僕と同じようにサッカーが大好きで、サッカーに明け暮れた毎日を送つたのは嘘ではないと言う。であるなら、僕の「サッカー」のルーツはやはり親父にあるのだろう。

前にも少し触れたが、僕が子どもの頃、親父はほとんど家にいなかったし、食卓を囲んで家族団らんをした記憶も当然ない。ただサッカー場にはいつも現れたという記憶がある。派手な格好車でやつてきて、その出で立ちのまま一緒にボールを蹴つてくれたことも懐かしい思い出。それが嬉しくて、親父にいいプレーを見せたくて、親父が観に来た試合は、なんとなく、自分の中で「特別な試合」になつていた気がする。

当時の親父の職業は……何だろう？ いろんな職業を転々としていて本業が何だったのかは知

らないが、とにかくいろんなアイデアだけは豊富で、それを頼りに仕事をしてきたと聞く。

例えばその一つがミカン売り。親父いわく、その昔、静岡ではお正月に飾る鏡餅かがみもちの上に置くミカンに夏ミカンを使っていたらしく、それをミカンに換えてもらうために、一軒、一軒、各家庭を訪ねてミカンを売って歩いたそう。静岡と言えば、お茶とミカンの名産地なのに、なんでミカンを使わないんだ」と思ったことが事の始まりだったらしい。

そう言うと、実家はミカン畑でも経営しているのかと思われそうだが、決してそうではない。つまり、親父の売り歩いてきたミカンは、そのへんで拾ったミカンだったらしく、そこがある意味、親父らしくもある。

また、「トゥモロー」というナイトクラブを経営した際には、ロサンゼルスからインディオと白人とメキシコ人の女の子を3人ほど連れてきて働かせたそう。しかも、そのアイデアが当たり、連日、外国人目当てのお客さんも含めて行列ができるほどの繁盛ぶりだったと聞く。そして、一番怪しくない仕事といえば、やはり日本で最初のサッカーショップ、「GOAL」を作り、サッカーをビジネスにしたことだろう。ここでは単にユニフォームなどを売るだけではなく、メキシコW杯のグッズを買ってきて売るなどしたらしい。当時はまだサッカーショップが珍しかったこともあり、いろんなアイデアを「商売」として、形にしていた。

そんな親父の「サッカー」における商売に拍車をかけたのが、カズの留学だったと言える。

実際、カズが中学3年生の時に「ブラジルに留学したい」と言い始めると、それを実現するた

めに、一足早く、何の伝手もなかったブラジルに単身で乗り込む。「俺が先に行ってカズが来られるようにしておくから」とだけ言い残して、だ。親父の凄いところは、そうやって、やると決めた時の半端でない情熱にある。言葉もろくに話せないのに———というか、初めて親父がブラジルに渡ってから30年ほど経った今でさえ、そのポルトガル語はかなり怪しいレベルだが———それでも見ぶり手振りと言語、情熱で仕事にしてしまう。

そんな親父と何度か一緒に仕事をしたことがあり、のちに僕とも一緒に仕事をするようになるエメルソン・レオンはかつて、親父の仕事ぶりについて、「納谷は決して人を裏切らない。彼は本物だ」と言っていたが、きつとお世辞ではないだろう。僕がブラジル留学をした際も、そんな親父の姿は何度も目にすることがある。交渉する相手と、言葉はほとんど一方通行でしか通じていないのに、相手の目を見て根気よく、しかも強気で話すことで、相手が親父に引き込まれていく様は、僕には真似のできない特技なのだと思う。

ブラジルのテレビ局が撮影したサッカーの試合のビデオを、日本のテレビ局に持ち込んで買ってもらったのも、親父が初めてだったそう。

今でこそ、衛星放送だ、スカパー！だと海外の試合も難なく観られる時代になったが、当時はまだ海外のサッカーが日本で観られるなんて想像もできなかった時代。親父によれば「ナイターの試合は暗すぎて、すごく映りの悪いビデオもあった」ようだが、それでも他にそんなことを考えつく人間も、できる人間もいなかった時代に、それをやってのけたのだから大したものだと思う。

ブラジルの日系人街でも、多くの仕事をしたそうだ。

当時は地球の裏側への輸出入のルートなどほとんどなかったこともあり、親父自身が日本とブラジルを行き来する際には、必ずと言っていいほど日系人街で買って来てほしいものを募り、それをビジネスにした。かまぼこ、海苔、まんじゅう、どら焼き……果ては、よく浅草などで売っている、胸に「一番」と書かれたTシャツやビデオまで……。数えればキリがないようだが、日本に戻る度に、いろんな「日本製品」を買い込み、スーツケースをパンパンにしてブラジルに渡った。

また、僕たち兄弟がブラジルに渡ってからは、選手の留学の仕事も始めた。

日本からブラジルに行くだけではなく、ブラジルから日本へ送り込むことをしたのも親父が最初らしい。アデミール・サントス（1995年に日本に帰化。現在は三渡洲アデミール）を85年に東海大・高に初めて「輸入」したのも親父だ。他にもブラジル人監督や選手を日本のクラブチームに送り込むようになったのも、親父が最初だった。

現在も親父が経営している「日伯フットボール」（ポルトガル語のフットボールフットボールの意）を設立したのもこの頃。ブラジルに事務所を構え、日伯フットボールを立ち上げると、日本サッカー界が日本サッカーリーグ（JSL）時代からJリーグ時代に突入するまで、留学生の送り込みと代理人業務を中心に、プレシーズンマッチのマッチメイクや、フェスティバルの開催、それにあたったのブラジル人チームの招聘や、選手、監督の獲得などに尽力した。そうして当時はお互いに情報も縁もなかった国同士の橋渡しをしていった。今でこそ、日本のJリーグには、

当たり前のようにブラジル人監督や選手がいろんなルートを使ってやってくるが、そうした日本とブラジルの今の関係があるのも、現地では知らない人がいないというほど有名な親父の存在があつたからだと言つても過言ではない。

余談だが、Jリーグ発足当時、一大ブームになつたブラジルの「ミサング」を覚えてるだろうか。あれを初めて日本に持ち込んだのも、親父らしい。「あれはかなりの儲けになつた」と後に自慢していたのを聞いたことがあるが、とにかくそういう先見性、アイデアには長けていたということだろう。

転んでもタダでは起きない人

そんな親父も、見ず知らずの地、ブラジルでの生活は、最初から順風満帆ではなかつたようだ。当然ながら、最初はやる仕事もなく、日系人街で皿洗いのバイトをする日々だった。

しかし、「転んでもタダでは起きない人」とは親父のような人のことを言うのだろう。バイトの時給が安く、生活に困つた親父は、得意だった麻雀をしに日系人が多く集まる雀荘に出向き、麻雀を楽しむことでたくさんのお金と知り合い、アイデアを得て、それをビジネスに発展させていったようだ。……と書けばカッコいいが、実際は麻雀で勝つことで生計を立てていたのだろう。僕がブラジルに住んでいる際、時々、日系人街にある寿司屋に行ったのだが、支払いの段になると決まって、店主に「お金はもらわなくて大丈夫だよ。お父さんにお金を借りているから」

と言われた。もちろん、親父の名誉のために言っておくと、麻雀でしか稼いでいなかったということでは決してないが。

勘も鋭かったのだろう。ある時、持ち金が日本円にして3000円しかなくなってしまった時に、一か八かで、その有り金を全てはたいて、サンパウロサッカー協会のパーティに出席したそうだ。

その一か八かが実を結び、パーティで人脈を作った親父は、信頼関係を築く中でブラジルと日本を繋ぐサッカービジネスを確立させたと聞く。

僕が留学している最中、現地でのサンパウロ州選手権の決勝戦で、10万人もの観衆が集まったモロンビ競技場のピッチに日本人学校の子どもたちが選手と一緒に入場してきたことがあった。後に聞いたところによると、これも親父が交渉した結果らしい。サッカー王国ブラジルで、しかも、日本人のことなどまだ知られていなかった時代に、まさか日本人の子どもたちがサンパウロ州選手権決勝の舞台に立つとは……これも、親父だから実現できたことだったと思う。

こうして先にブラジルに渡り、一から人脈を作り、環境を整えてくれた親父の尽力もあって、カズは15歳の時にブラジルに渡った。本心を言えば、中学卒業と同時に行きたくはしく、中学3年生の時の進路指導では、第一希望の志望校の欄に「ブラジル」と書いたらしい。これはお袋から聞いた話だが、ブラジルに行けると信じて疑わなかったカズの正直な気持ちだったと思う。だが、先生には「ふざけたことを書くんじゃない！」と怒られたらしい。まさか真剣にブラジ

ル行きを考えるなんて思えなかった時代だったからだ。当時はまだ、ブラジル人は何語で話すのか？ というような基本的な常識でさえ、たいていの日本人が知らない時代だった。

その時は、何も環境が整えられていなかったこともあり、15歳のカズはブラジル行きを断念。代わりに親父が「分かった、じゃあ俺が行ってカズが来られるようにしておくから」と先にブラジルに渡ったのはすでに書いたとおりで、カズは僕がいた静岡学園に入学する。

そんなカズの「ブラジル」への思いをさらに強くさせたのが、僕が高校2年、カズが高校1年の82年に行われたスペインワールドカップだ。

当時、僕らが応援していたブラジル代表は、最強と言われながら2次予選でイタリアに2-3で逆転負けを喫し、敗退してしまう。憧れの地であり、ブラジルのサッカーを崇拜していた僕らにとって、その敗退は衝撃的で、「なんで、こんなにいいサッカーが負けなくちゃいけないんだ」と二人して悔しがった。

その時に僕は初めて、カズの口から「僕はプロになる。そしてブラジル代表になるよ」という言葉を聞いた気がする。当時はまだ高校1年生だったとはいえ、ブラジル国籍がなければブラジル代表にはなれないということを知らなかつたわけではないだろう。だが、いずれにしても、カズの決意が相当なものであったことは、間違いない。今でもその時のことが鮮明に僕の脳裏に焼き付いていることから、それは証明されている。

静岡学園に入学こそしたものの、学校生活の中でのカズはといえば、どこか真剣にはなりきれない様子で、学校にも馴染めず、サッカー部でもレギュラーになれなかつたせいかな、それほ

ど気合いが感じられなかった。小学生時代と同様、どこか「心ここにあらず」といった感じで、僕と比べても、そこまでサッカーに賭けているように見えなかった。後に美談として語られている話の一つに、カズが授業中、サッカーボールで遊んでいたらそれを先生に取り上げられ、「サッカーボールは僕の命だ!」と言って取り返したという話がある。この話も僕にしてみれば、「実は授業が嫌だったただけだろ?」と突っ込みたくなるような出来事だ。前章で、カズが授業が始まっているのにウォークマンを聴きながら廊下をタラタラ歩いていた話を披露したが、実際、「カズが授業をさぼって寮で寝ていた」など、素行態度のことでお袋が学校から呼び出しを食らったことも何度かあった。

このように、どこか高校に馴染みきれないカズを見ていたから、僕はカズのブラジル行きを止めなかったのかもしれない。高校時代の僕は、思っていることはハッキリと口にする「嫌われ者のキャプテン」だったし、また大事な弟だったので、カズが本当に静岡学園で頑張るべきだと思っていたなら、きっとそう伝えただけからだ。

もちろんこれは、あとになって感じたことで、当時は僕も自分のことで精一杯だったから、カズの将来を考えたり、カズを気にしてサッカーをしていたはずはなく、カズを止めるという発想さえなかったのかもしれない。

ただ、たとえ直感だったとしても、僕が「カズを行かせてやってください」と言うに及んだのは、カズはここでは生きにくいんだ、ということを僕なりに察していたからだろう。実際、カズは僕から見ればとてもいい選手だったが、僕のように日の丸をつけるチャンスはおろか、トレセ

ンにさえ選ばれることはほとんどなかった。それはカズのプレースタイルが、「日本」では認められにくいものだったということの意味してもいた。

日本の空気にどこか馴染めない感じだったのは、うちの親父も同じだった。先に書いたとおり「カズが来られるようにしておく！」とカツコ良くブラジルに渡った親父だったが、正直、親父もまた日本では生きにくい、日本の風習に馴染むことのできない性格だったと思う。そういう意味で、あの2人は似ていると、僕はずっと思っていた。……カズは嫌がるかもしれないが。

カズが決意を話してくれた時

本気でブラジル行きを決め、僕に決意を話してくれたのはカズが高校1年生の11月のことだ。全国高校サッカー選手権の静岡県予選で敗れた後、その決意をカズから聞いた僕は、一緒に井田監督のところへ行き、気持ちを伝えた。カズの意思は固かった。

「僕はブラジルでプロになる」

井田監督からはすぐさま答えが返ってきた。

「99%、不可能だ。そんな甘い世界ではないんだ」

怒鳴るでも、バカにするわけでもない。ただ、井田監督自身もブラジルサッカーをこよなく愛し、いろんな情報を耳にしていたからだろう。まるで全てを悟っているかのような言い方だった。それでも、カズの意思は揺らがない。

「僕はブラジルで勝負する」

「ブラジルに行つて、成功しなかったらどうするんだ？」

それには僕が返事をした。

「僕が頑張つて日本リーグに入り、もしカズがブラジルで成功しなくても、自分のいるチームに入れてもらえるようにします」

これもまた全く根拠のない答えだった。その時はまだ自分がブラジルに行くことになると思つてもいなかつたし、選手権に出るんだという思いしかなかつただけに、きつと僕なりに、弟の思いを理解してもらおうと必死だつたのだと思う。

結果的に、周りにいた全員がカズの決意を汲み取る形で、ブラジル行きは現実となる。

出発が近づいたある日のことだつた。カズがまだ15歳ということもあり、ブラジルでの身元保証人になってくれるという人が、お袋が経営していた「もんじゃや」にやつて来た。

「カズくん、治安が悪いブラジルに来るといふことは、親の死に目にも会えないかもしれないよ」

「それでもいいです」

カズはハッキリと言い放つた。考えてみれば子ども時からカズは、自分の意思と信念で行動する奴だつた。だから、親の話を持ち出されたくらいで、その意思が揺らぐとは思えなかつた。ただ、今振り返つても、さすがのカズも、母親の目の前でその言葉を言うことは、決して簡単で

はなかつたはずだ。あの時カズも、ひるんではいけないという思いで自分を奮い立たせていたのかもしれない。僕はその言葉を、頼もしくも寂しくも感じながら、店の片隅に座ってじっと聞いていた。

親父はたしかに偉大だが、僕らのお袋、三浦由子は、親父以上に偉大だと思う。いや、僕だけではなく三浦家を知っている人なら、誰もがそう口を揃える。

親父はもちろんのこと、今こうして僕ら家族が元気に暮らしているのは、すべて、お袋のおかげ。そもそも、あの親父の妻は、お袋にしか務まらないだろう。

親父と離婚してからというものの、お袋は女手ひとつで僕ら3人の兄弟を育ててきた。

生活し、子どもたちを育てるためにと、専業主婦から一転。友だちのアドバイスを受けて、東京の月島で本場の「もんじゃ」を学び、その後、静岡初の「もんじゃ」を立ち上げ、仕入れから、経営まで全てを1人でやってのけた。

僕たちが住む家は高校生になるまで、「もんじゃ」の2階にあったこともあり、僕ら兄弟はそんなお袋の頑張りをいつも目の当たりにしていた。酔っぱらい客が遅くまで帰らずにいると、僕が出て行って「帰れ!」と追い出したこともあった。お袋は、そうやって生活を切り盛りしながら、僕らを育ててくれたのだ。

考えてみれば、あの頃のお袋は今の僕より若かったが、生活がかかっていたからだろう、とにかく生きるバイタリテイに満ち溢れていた。

そんなお袋と大人になって話をした際、「私は自分の人生で一度も後悔したことはない」と言ったことがあったのだが、もちろん僕は、「嘘だ！」と言って認めなかった。なぜなら、親父と結婚していなければ、お袋はもっといい人生……穏やかで静かな女性らしい人生が送れていたと思うから。ただ、そうなると僕ら兄弟が生まれてこなかったことになるため、そこは悩むところだが、どう考えてもお袋は必要以上の苦勞をしてきたように思う。

僕が子どもの頃に、お袋が親父との喧嘩に堪えかねて、荷物をまとめて静岡からいなくなったことがあった。

その間、僕ら兄弟は祖父母の家、つまり親父の実家に預けられ、学校に通ったりしたのだが、たまにかかってくるお袋からの電話に何度、涙を流したことか！ 話した内容はあまりよく覚えていないが、とにかくお袋が側にいないことが寂しくて仕方がなかったのだけは確かな記憶だ。あとから聞いたことだが、その時、お袋は静岡を離れて東京に住み、デパートの紳士服売り場で働いていたそうだ。「売り上げナンバーワンだったのよ！」と自慢気に教えてくれた。

ちなみに、そんなお袋の行動に対して親父はといえば、お袋がいなくなつて、いよいよ自分が親らしいことをしなければいけないと思つたのだろう。僕らが預けられていた祖父母の家にたまたに現れた時には、カズや妹の美華子が「飯食わせ！ 飯食わせ！」と言つてお箸で茶碗を叩きながら待っているのをなだめながら、不器用さ丸出しでレトルトのハンバーグを温め、出してくれたりしていた。カズと美華子の2人は「まずい！ こんなの、食えねえよ！」などと平気で文句を言っていたが、長男の性分なのか、僕は親父に氣を遣つて「旨いじゃねーか」などと言いな

ら、2人を無視して食べていた気がする。

僕の目から見ても苦勞が絶えなかったお袋だから、今になって考えると「離婚」という結論は仕方なかったのだと思う。もちろん、夫婦のことは2人にしか分からない。しかも当時、まだ子どもだった僕たち兄弟に、大人の事情など知る由もなかったというのも事実だ。両親が離婚することに少しはショックもあったと思うが、それ以上に、お袋がいなくなってしまう時期の寂しさの方が強かったので、当時中学2年生だった僕が、最終的には「お袋がいてくれるならいいや」と思っていたというのも正直な気持ちだ。

おそらくはカズもそれは同じで、子ども時代の僕ら兄弟にとってのお袋は、そのくらいかけがえない偉大な存在だったと思う。だからこそ、そのお袋の前でカズがハッキリと伝えたブラジル行きの決意は、今になっても本物だったと思う。

妹・美華子のこと

ちなみに、僕らが育った静岡の長谷通りで、お袋が必死に切り盛りしてきた「もんじゃや」は、今は同じ長谷通りの別の場所で、妹の美華子がお袋の味を継いで経営している。

そう。世間的にはあまり知られていないが、僕たち兄弟には、妹の美華子がいる。

僕より5歳年下の美華子は、僕ら兄弟にとっては本当に可愛い妹で、特に子ども頃の頃は、マスコットのように可愛がっていた……はずだ。正確には、あまりにサッカーに明け暮れすぎて、子

どもの頃、美華子がどこで何をしていたのか、どんな妹だったのか、ほとんど思い出せない。

僕ら兄弟とは違ってサッカーには全く興味を示さず、確か町のバトンクラブに入っていたはずだが、美華子が家でバトンの練習をしている姿こそ見たことがあっても、大会などに出場している姿は目にすることがない。ただ、周りからはよく「もし美華子が男で、サッカーをしていたら、3人の中で一番いい選手になっていたはずだよ」と言われていたのは知っている。その理由の一つが「親父に似ているから」らしいが、親父に似ているから一番いい選手になっていた、なんて僕にしてみれば最も説得力のない言葉でしかない。

そんな美華子も、僕が年を重ねた分だけ年をとったはずだが、僕にとってはいつまで経っても19歳くらいの感覚しかない。なぜ19歳なのか？ 実は美華子が19歳の頃、つまり僕が読売クラブでプレーしていた時代、僕が住んでいたマンションと一緒に暮らしたことがあるからだ。

2年間、東京の短大に通うことが決まった美華子は、なぜか僕のマンションに転がり込み、一緒に住み始めた。ただ、一緒に住んだ2年間のうち、顔を合わせたのはほんの数日だけだ。行動の時間帯も違ったし、美華子が「彼氏のところに泊まりに行く！」と言うと、僕は喜んで送り出したため、結果的に顔を合わせることはほとんどなかったように思う。その状態は今も続いていて、美華子と顔を合わせる機会はほとんどない。

僕ら2人を兄に持った美華子は、彼女なりに大変だったこともいろいろとあっただろうし、女の子ゆえ、親父やお袋に感じていたことも僕ら2人とは少し違ったはずだ。僕らがサッカーに明け暮れていたことで、寂しい思いをしたこともあっただろう。

そう思うからこそ、もう少し可愛がつてあげられたらよかつたのだろうし、今も、たまには「もんじゃや」に行つてあげられたらとは思つているのだが、僕の性格だろうか、なかなか実行に移せない。カズはちよくちよく「もんじゃや」を覗いてのぞいるらしいが、僕はそうでもない。ただ、なぜか美華子は昔も今も、僕には滅法弱いようだ。弱みを握つていゝつもりはないが、そのへんはカズに対してもそうであるように、兄としての威厳を保つていゝのかもしれない。

ブラジルに行くつと決めたカズが、少しか少年らしい顔を見せたのは旅立ちの日だつた。

たくさんの友人に見送られて静岡駅を出発する瞬間、初めてカズの目からドツと涙が溢れ出たのを、僕は今でも鮮明に覚えていゝ。そこでどんな言葉が聞かれたのか、カズが挨拶をしたのかどうか覚えていゝない。ただ、あれだけ平気な顔をしていゝカズと、流した涙とのギャップに、どこか違和感を覚え衝撃を受けたのは事実だ。

その日の夜、僕たちはお袋と僕、カズと妹の4人で、渋谷にある薄暗い感じの普通のビジネスホテルに泊まつた。そこで何かを感傷的に話した覚えはないから、きつと翌朝、成田空港に行くための通過点でしかなかつたのだろう。近くのレストランで食事をしてホテルに戻つた僕たちは、普通に寝て朝を迎えた。

翌朝、成田空港でカズを見送つた。

搭乗手続きを終え、エスカレーターで降りて行くカズを僕たちは上から見送つていたが、カズは振り向くことなく、後ろ向きのまま手を挙げて、ブラジルに旅立つた。わずか15歳の少年が、

24時間以上もかかる地球の裏側、ブラジルに旅に出るだけでもすごいことだったが、カズはそのブラジルで、サッカー選手としてチャレンジするのだ。想像するだけでも……いや、想像すらできないことをやってのけようとしている弟の存在が誇らしくもあり、僕は何となく置いて行かれた気にもなった。

旅立ちの前日、僕はそうした思いを手紙にしたためてカズに手渡した。思えばブラジルへ旅立つその日まで、僕ら兄弟はそれほど多くの会話をしてきたわけではなかった。サッカーに対する思いもそれぞれ違ったし、それぞれが自分のことで精一杯だったからだ。だからきつと、その手紙にもたいしたことは書いていないと思うが……というより、書いた内容は全く覚えていないが、僕がカズに渡した初めての手紙だったことは間違いない。

あの手紙を、カズは今でも持っているのだろうか。

カズがブラジルに渡って以降、カズについての情報は、周りからチラホラ話を聞く程度。僕が後を追ってブラジルに渡るまで、詳しくは知らない。親父が送って来たブラジルサッカーのビデオを見た記憶はあるが、きつとお袋のものには届いていたであろう手紙も、僕は読んだ記憶はない。

冷たいようだが、自分のサッカーに必死で、いなくなってしまうカズを気にする余裕はなかったのだと思う。だから僕が本当の意味でカズのブラジルでの戦いを目の当たりにしたのは、自分が高校3年生の選手権予選に負けて、ブラジルに渡る決心をして以降のことだ。

押し寄せる不安

ブラジル行きを決心した日から、僕は期待に胸を膨らませる毎日を送っていた。

「好きなサッカーを憧れのブラジルでやれる」という思いは日に日に大きくなり、気持ちがかき立てられた。カズに直接連絡をとることはなかったが、カズがブラジルにいる事実は僕の緊張をほぐすための、大きな材料になっていたと思う。

ところが、映画やマンガのように、カッコいい旅立ちとはいかず、出発の日がいよいよ1週間後に迫ると、なぜか大きな不安に襲われた。心の中を渦巻く葛藤がものすごく、「ブラジルにはカズも親父もいるんだ!」と自分を落ち着かせようとしても、全く落ち着かない。出発の日は朝から顔色も悪く、出発時刻が迫るにつれて、どんどん青ざめていった。

脳裏に浮かんだのはカズが出発した日のこと。あの日、カズの目からドツと溢れ出た涙がフラッシュバックしてきて、「おそらくカズはこういう気持ちだったんだろうな」などと思いついた。

僕の出発の日も静岡駅にはたくさんさんの友だちが来てくれた。その中には静岡学園でお世話になった野田先生の姿もあった。ただ、僕はとにかく気持ち落ち着かないし、不安でたまらない。先生に会った時も、きつと顔色が悪かったのだろう。「なんだ、ヤス。顔色が悪いじゃないか。どうした?」と野田先生に声を掛けられた。そこで僕が素直に「本当は憧れのブラジルに行くん

だから嬉しいはずなんですけど、不安で……」と白状すると、野田先生はこう言った。

「バカか、お前は。いいか、ヤス。実は俺も若い頃に教員として海外に行くチャンスを与えられたことがあったのに、俺は決断できなかった。でもお前は、それを決断したんだ。日本の裏側に行くだけでも、お前は凄いだぞ。カズがブラジルでどんな風に過ごしているのかは関係ない。俺はお前がたとえ、1日で帰って来たとしても、お前のことを男だと思う」

その言葉に少し気持ちが救われたのは間違いないが、それ以外のことはあまり覚えていない。きつと、これからのことで頭がいっぱいで余裕がなかったのだろう。誰が見送りに来てくれたのかということも、同級生で3年間同じクラスだった親友、繁田和伸くんが来てくれて、抱き合っていて泣いただけでかろうじて覚えているという程度で、あとは、全て本人たちの申告によって知っているだけだ。ただ、高校時代に書いていたサッカーノートの名残^{なごり}で、思いを書き留める^とことがクセになっていた僕は、飛行機の中で持っていたノートにこう書き留めたのを覚えている。

「これから僕の第二の人生が始まる」

飛行機の中ですでにホームシックになる自分を感じながら、24時間。いよいよブラジルが近づき、飛行機が低空飛行をはじめた時に窓から外を見渡すと、サッカー王国だというのに、スタジアムが全く見つかからない。しかも降り立った場所は、カンピナスという超田舎で、地上に足をつけた瞬間は、来た方向を振り返り、カメラがまわっているわけでもないのに「遠くまできたなー」と一人で感慨にふけたものだ。

税関を抜けると、そこには親父が待っていて「おお！ よく来たな。お前が来るっていうから、車を買っちゃったよ」と言われ、フィアットという新車に乗せられた。途中、「喉が渴いただろう。ちよつと寄つていこう」とバールに立ち寄つたら、出て来たのはブラジル名物のガラナジュース。その時初めて目にしたガラナジュースは、ビール色をしていたため「うわっ。昼間からこんなのを飲むの？ これ、ビールでしょ？」と僕。「ビールじゃねえよ。ブラジルのコーラみてえなもんだ」と親父に教えられた。初めて口にしたブラジルの味は、とても美味しかった。

ただ着いた直後から嫌な予感はしていた。

暑いし、空気はどんよりしている。しかも超田舎。確か、到着後、3〜4時間、親父のフィアットに揺られて親父が泊まっていたホテルに到着し、すぐにカズに会ったはずだが、ここの記憶はまたしても欠落している。どうも、自分のことではいっばいっばいになっている時は、他の記憶が頭に残らないらしい。

ただ、ブラジルに着いて2〜3日は、所属チームが決まっておらず、特にすることがなかったため、カズが所属していたジュベントスの練習に付いて行った記憶はある。しばらくは、生活も含め、基本的にカズにおんぶに抱っここの毎日だった。

だが、一向にブラジルに慣れることができない。

最初に受けた洗礼は、監督に認められ入団したサントスのジュニオール(U-20)での寮生活で起きた出来事だった。寮に入って間もない頃に、同じ部屋のテスト生が不合格になってチームを去ることが決まった。その日、練習から戻ってみると、僕の所持品がなくなっていた。時計、

ラジカセ、トレーナー……日本から持ってきて大切にしていた品々が、勝手に「お土産」として持っていかれてしまったのだ。

この事件は僕のブラジルに対する「心の壁」を高いものにした。さらに、僕の前に大きく立ち上がったのは「言葉の壁」だった。言葉を覚えるのが遅い自分にも問題があったとはいえ、ブラジル人の会話の中に「ジャポネイズ」という単語が出てくるだけで、意味もなく頭に来た。

当時のブラジル人は、日本人がサッカーをできるとは思っていなかった。つまり「ジャポネイズ」サッカーが下手」という意味に使われていた。僕が試合の時にベンチに座っただけで「おい！ ジャポネイズ！」と挑発してくることもたびたびあった。あるいは、僕に向かって「アチヤ〜」と空手のポーズをとってみたり、「ナカシマ！ ナカシマ！」と呼んでからかわれたり。当時、ブラジルではアイルトン・セナが世界一のドライバーとして輝いていたが、そのセナと争う日本人ドライバー、中嶋悟さんはブラジルでも有名な存在だった。

そんな環境であっても自分のパフォーマンスを発揮しなければいけない。与えられた時間は短くても、それが言葉のできない僕が自分自身を出せる唯一の手段だったからだ。だが、道のりは険しかった。

ある日の練習試合でのこと。遠征メンバーに選ばれた僕は、後半から途中交代でピッチに立った。すると、開始から5分も経たないうちに、後ろから軽くチェックにいっただけで、スライディングすらしていない僕にレッドカードが出されてしまう。もちろん、相手選手は大げさに転んでいたが、正確にはファウルかどうかでさえ微妙なプレーで、だ。

つまり、僕が戦っていたのは相手チームだけではなかったのだ。ブラジルでの試合は、11人の相手選手と、10人の味方選手、主審1人と、副審2人の計24人が敵。のちに僕はS級ライセンスの取得にあたって「サッカーに携わる全ての人をリスペクトしよう」という素晴らしい講義を受けたが、この時は、全てがその言葉と対極にあった。

中には僕のもとにやってきて「あれはファウルではないよ」と声を掛けてくれたブラジル人もいたが、そもそも僕自身が彼らを信用していなかったのだろう。「どうせ心の中では『ざまあみろ』」と思っているんだろ!」と思い、その言葉さえ素直に受けとることはできなかった。

練習でも嫌がらせは続いた。

彼らが練習中、あるいは試合中にドリブルで僕の股間を抜こうものなら、シャワーを浴びている間中、しつこく「ヤスの股間を抜いてやったぜ!」と絡んでくる。しかもその会話の中に、「ジャポネイズ」という単語が出てきた途端、勝手に身体が反応し……。実際、僕を褒めているのか、悪口をいつているのかくらいは何となく察しがつくこともあり、相手の胸ぐらを掴んで殴り合いの喧嘩に発展したことは、何度もあった。

全てを否定された挫折の日々

有名なブラジル料理「フェジヨン」は半年間、食べることができなかった。

日本の甘いぜんざいのような豆料理で、ブラジル人はこれを毎日、ご飯にかけて食べる。日本

で言うところの味噌汁のように、食卓に並ばない日はないと言っていいほどの定番料理だ。そんなブラジル料理も全く好きになれず、ましてやブラジル人とも合わず、喧嘩ばかりの日々。ホームシックにもかかり、辛いだけの日が続いた。

サッカーに限らず、いろんな意味で日本では自信満々に生きてきたはずの自分が、後頭部を金槌で思いきり殴られたような気分で、何をしてもうまくいかない。そのうちプレーでも、今までにしたことのないような凡ミスをするようになり、一方でブラジル人選手の本能的なプレーには度肝を抜かれ、圧倒された。

そんな経験は自分のサッカー人生において初めてのことだった。高校時代はユース代表にも選ばれ海外に遠征したが、日の丸を背負い仲間と一緒に戦った「海外」と、自分一人だけの力で戦う「海外」は全く別ものだと思いついた。これまで自分の実力だと思っていたものは、すべて周りの仲間にパワーをもらってこそ成り立っていたもので、決して自分だけの実力ではなかったんだということに気づかされたのもこの時だった。

日本でなら「このプレーが通用しないなら、違うプレーで一番になって、見返してやる」と思ってたやってきた僕だったが、自分が自信を持っているようなプレーや能力は全て、ブラジル人には当たり前のように備わっていた。だから、自信も失ったし、レベルの差、サッカーの差を痛感し続けた。

全てを否定され、まさに、挫折の日々だった。

【写真】

そんな僕の唯一の救いは、カズとの会話だった。

ブラジルでの僕たち兄弟は、親や友だち、自分たちの身の上話、女の子の話にまで花を咲かせた。日本ではサッカー以外のことはほとんど話をしたこともなかったのだが——というより、そのこと自体にもブラジルに行つてカズと話途中で初めて気づかされた——改めて自分たちが兄弟であることに思い出したかのように、近所のバールで会つては「1週間記念だね!」と言つてガラナジュースで乾杯をしたし、それ以外にも何かと理由づけて、二人でいろんなお祝いをした。

先にも書いたとおり、僕はカズがブラジルに行つてからのこともほとんど知らなかったし、敢えてカズも多くを語ることはなかった。が、おそらくカズも最初は、僕と同じように辛い経験をしてきたのだろう。僕のやり場のない気持ちを察してくれたのか、僕がブラジルに行つて間もない頃は、本当によくブラジルでの楽しい話をたくさん聞かせてくれた。美味しいもの、楽しい場所、ブラジル人のいいところ。その頃はカズのブラジルでの生活も3年目に突入し、カズ自身は本当に楽しいことも見えるようになっていたのだろうが、行つて間もない頃は、きっとそうではなかったのだろう。そんな風に氣遣つてくれるカズの存在が本当に嬉しく、僕の唯一の救いだつた。

中でも「血」の話は今でも印象深い。

友だちから遠く離れ、連絡をとる手段は手紙のみ。今のようにはパソコンも携帯電話もなく、国際電話だつてお金がかかるから、特別な時しか使えない。だから僕たちは日本に手紙を書き続け、その返事を待ちながら毎日、郵便受けを見るのが楽しみだったが、少し返事が遅れただけ

で、「友だちは僕らのことを忘れてしまつて、友だちではなくなつてしまふかも」と不安に感じること、たびたびあつた。そのことをカズに言う、彼は真顔でこう答えた。

「友だちは血がつながつていないから、僕らのことを忘れてしまふ子もいるだらうね。だけど、お袋、親父、おじさんたちは、血がつながつていからいつも僕たちのことを心配してくれるし、どんなことがあつても逃げていかない。僕らのことも見捨てない。僕らには『血』の繋がりがあつるから大丈夫だよ」

日本から遠く離れたブラジルの地で、初めて家族というものを考えさせられた瞬間だつた。

「親父が初めてカズを殴つた」事件

僕がブラジルに渡つた頃にはカズもブラジルで評価を受けるようになっていたが、それでも、カズにはカズなりの戦いがあつたのだろう。僕がブラジルに行つてからも『事件』はいろいろあつた。

例えば「親父が初めてカズを殴つた」事件。

いつだつたか、親父が僕のいたサントスの試合をフラツと観に来たことがあつた。その試合で僕はサイドバックをやつたのだが、調子がいまひとつ悪く、「せっかく親父が観に来たのに、こんなに出来が悪かつたら、サンパウロには連れて行つてもらえないだらうな。今日もサントスの寮に泊まらなきゃいけないのか……」と思つていたら、親父が意外にも「ヤス、サンパウロに一

緒に帰ろう」と言ってくれたのだ。

僕にとつてのサンパウロは、リベルタージという日系人街がある、ブラジルの中で唯一、日本を感じられる場所。親父もそこに住んでいた。だから、僕もカズもサンパウロが大好きで、ことあるごとにサンパウロに行くことを楽しみにしていたが、親父には「サンパウロにばかり戻ってきていたらブラジルにも馴染めないし、ましてや練習もできない」という考えがあったらしく、滅多にサンパウロに行くことは許してもらえなかった。それでも子ども心に「いいプレーをした時には、もしかしたら親父も機嫌が良くなってサンパウロに連れて行ってってくれるかもしれない」と期待したものだ。だから、親父が観にきた時に、いいプレーができないと、「これで、絶対にサンパウロには連れて行ってもらえないな」と、いつもの何倍も自分を悔いた。

だから、あの時の親父の言動にはビックリした。

調子が悪いのにサンパウロに連れて行ってもらえないなんて、普段なら絶対にあり得ないからだ。そこで驚きを隠せずに「え?! いいの!」と僕が言うと、「おうっ。帰ろう」と親父。そうして親父の運転する車に乗ってサントスからサンパウロ方面に向かって走っていると、運転をしながら親父が深刻な顔をして僕に切り出した。

「実は今日、カズを殴ったんだけど、どう思う?」

理由を尋ねると、こういう話だった。カズがオフだからという理由で、サンパウロの日系人街、リベルタージに行きたいと親父に直談判をしたらしい。それに対して「残って練習をやっておけ!」と言われたにもかかわらず、親父の言葉を無視してカズが勝手にリベルタージに行き、そ

れがバレたのだ。しかもカズが「じゃあ、日本に帰る！」と言いつつ返したため、親父がキレて思わず手が出たらしい。

その話を聞いた僕は「俺も親父には1回も殴られたことないし、カズも初めて親父に殴られたんだから、それはショックだと思うよ」と気持ちを伝え、親父も「そうだよな」と言っていたが、今になって振り返れば、この時、僕らは初めて親子らしくなれたのかもしれない。というのも、僕らが子どもの時から親父はほとんど家にいることはなく、一般家庭に比べたら、顔を合わせる機会も極端に少なかったため、親父が息子を殴るようなシーンもなかったからだ。だから、カズを殴ったと聞いた時は、「親父にも殴るような親心があつたんだな」と、ある意味、驚いている自分もいた。

ちなみに、この事件の後、カズはなんと本当に日本に帰国してしまった。

期間にして確か1ヶ月ほどだったか。当時のブラジルでは、日系人街に行き「日本に帰るチケットを用意してくれて、親父が言っていた」とでも言えば「納谷の息子が頼んでいるなら」と言わんばかりに、周りが何でも手助けしてくれたのだろう。カズは勝手に自分で帰国の段取りを整え、直前になって僕にだけ「俺、日本に帰ってくるから」と伝えてきた。それに対し僕も「分かった、じゃあうまく言っておくから」と根拠のない返事をして送り出した。結局、その後再びブラジルに戻ったカズがどうなったのか、これまた記憶にない。ただ、再び親父がカズを殴ったという話も聞かなかったから、きっとなんとなく丸くおさまったのだと思う。

そういうえば、ブラジルにいながらも日本の情報に精通していたカズに驚かされたことがある。

しかも、サッカーだけではなく、芸能界についての情報も、だ。

それを顕著に表すエピソードとして挙げられるのが、僕がブラジルに留学して1年くらい経った頃に行われた、静岡サッカーのフェスティバルだ。

JSLで活躍するブラジル人選手選抜「オールアミーゴス」対静岡出身の「JSL選手選抜」の試合に、僕ら兄弟もオールアミーゴス側で呼んでもらえることになり、一時帰国をしたことがあった。その時、カズは、大好きなとんねるずのテレビ番組『オールナイトフジ』にマッチ（近藤真彦）のような髪型で出演。「ブラジルにすごい日本人選手がいる！」的なノリで取り上げられたのだが、番組の中でとんねるずの2人から「日本のサッカーがもつと強くなるにはどうしたらいいと思う？」と聞かれたカズは「もつとプロ意識を持たなければいけない」と答えていた。そこまではいい。僕が驚いたのはその後だ。

とんねるずの貴さん（石橋貴明）との絡みから、話とはとんねるずが当時所属していた「A to Z」という事務所の話に及び、貴さんに「じゃあ、カズくんがビッグになったら、まずはA to Zを買い上げちゃう？」と言われたカズは、普通に「それは一番いいですね！」と返事をしたのだ。

つまり、僕が驚いたのは、カズが「A to Z」を知っていたこと。とんねるずのことは、もちろん僕も知っていたが、彼らの所属事務所の名前まで知っているとは……。インターネットという便利なものがなかった時代に、僕はもちろん、一般人がなかなか知り得ないような情報を、ブラジルで生活していたカズがどのように手にしたのかは分からないが、とにかく、カズはそうい

う芸能情報にもやたら詳しくかった。ちなみに、その数日後、代々木公園に走りに行ったら、偶然、貴さんに遭遇したらしく「お〜い！ サッカー少年！ 何をやってるんだ?!」と声を掛けられたと嬉しそうに話していた。

考えてみれば僕は子どもの頃から「サッカー少年」として順風満帆な日々を送ってきた。小学校6年生で中学3年生の試合に出て活躍したことが良かったのだろう。日本のトップカテゴリー、ナショナルトレセンに呼ばれ、U-16、U-18日本代表でプレーすることができた。同じようにカズも僕の弟だったこともあり、注目されてはいたが、僕ほどではなかったというのは正直なところだ。

僕が高校2年、カズが1年の時、日本ユース代表と試合をした際も、揃って先発したものの、日本サッカー協会の人は、誰一人としてカズを評価しなかった。当時は、基本的に身体的な要素ばかりが重要視され、技術、つまりは個人技にこだわる選手があまり好まれていなかった時代だった。だからカズは評価されなかったのだろうが、一方の僕はと言えば、評価こそされていたものの、身体能力は低く、トレセンに選ばれたとしても身体測定をすると常に下の方。ただ、集団の中で規律を重んじながら、自分の技術を発揮しようとする分だけ、カズよりは評価されていたのだと思う。

つまり、少年時代のカズは、規律を重んじるような選手ではなかったということだ。実際、前に紹介したように、少年時代は僕がいつもジャージを着ていたのに対し、当時からカズはお祭り

にさえオシヤレな赤のスタジャンを着ていくような子どもだった。それは今も変わっていない、僕はカジュアルな格好を好み、カズはびしっとフォーマルなスーツを好む。子どもの頃からはつきりと自分を主張するカズらしいエピソードだが、その個性はプレーにも表れていた。それだから、子ども時代のカズは日本で評価されることがほとんどなかったのかもしれない。

公式戦に一度も出ないまま帰国を決意

だがブラジルでは、僕らの評価は一転した。

僕より約2年早くブラジルに渡ったカズは、練習試合を観に行ってもドリブルに力強さが生まれ、ブラジル人選手の中でも、遜色ないプレーをしていた。

僕もカズも同じようにブラジルに憧れ、プロを目指したが、留学生としてではなくプロサッカー選手として8年間ブラジルで過ごした彼とは違い、公式戦に一度も出場できなかった。2年間の留学中に渡り歩いたクラブは四つ。2部のナシオナルというプロクラブでプレーしたあと、サントスのジュニオールのテストに合格したが、ここでは出番はなかった。その後、「田舎のクラブに行きたい」と自ら希望して3ヶ月間はパラナのFCマツバラで修行ともいえる経験を積んだのち、サントスに戻ってジュニオール世代では最高の大会、タサ・サンパウロ出場を目指して練習したが、メンバーには一度も入れることなく、帰国を決意した。その後、日本に帰るまでの1ヶ月は、パラナ州のアプカーナというプロクラブの練習に参加して、ブラジル生活を締めくく

った。

だが、こうしてあちこちでプレーしながらも、僕は言葉を覚えるのに時間がかかった。ポルトガル語をほとんど吸収したカズとは違った。幸い、ケガをすることはなく、蹴ろうと思えばいつでもボールを蹴れたし、走ろうと思えばいつでも走れたことが唯一の救いになったが、もしブラジルで大ケガでもしてサッカーができない状況になっていたら、僕は二度と立ち上がれなかったことだろう。

カズと僕の違いは何だったのか。

おそらくは「ブラジル」の受け入れ方の差だろう。言いかえれば順応性と言おうか。カズは、現地にも友だちをたくさん作り、ブラジルのコミュニティにもどんどん自分から入っていったし、何よりブラジルのことを決して悪くは言わなかった。それに対して僕は、真面目すぎたのか遊びには全く興味を示せず、ほとんど友だちらしい友だちもできなかった。もちろん「ブラジル」も嫌いだった。

ブラジルで成功できなかった原因が自分にあったと気づいたのは、日本に戻り、たくさんの時間が過ぎてからだ。

ブラジルだけではなく、日本にも気の合う仲間、そうではない仲間がいるし、そのことと、相手を受け入れることは別だということ。時に、気が合わないと思ってても、自分から歩み寄ること必要だということ。ブラジルで彼女を作るなんて発想は全くなかったが、もう少し柔軟に考え

て彼女を作っていたら、もっと早く言葉を覚えられたかもしれない、ということ。ブラジル料理が嫌いなのではなく、「バカにされたくない」一心で必要以上に日本人である自分に拘っていたこと。日本では当たり前になってきたことなのに、ブラジルでは同じことを受け入れる自分を拒んでいたこと。そして何より、自分がポルトガル語を話せないことを棚に上げて、またサッカーが通用しないことを認めたくなくて、「ブラジル」を嫌いだと言い続けたこと。その全てが自分の弱さであり、挫折だったのだと思う。

思えば、あの時の僕は何かが起きる度に、「こんなところにいるくらいなら、日本の刑務所にいた方がまだ！」と思っていた。それでいながら、日本円にして500円くらいのお金を持ち合わせていた日は、カズと2人で「今日の僕らはお金持ちだね！」と言ってサッカーをしていた。そんな経験はきつと二度とできるものではない。だから、やっぱりブラジルで味わった人生の「暗さ」は、僕の原点だと思う。

成功したのではなく、全く成功しなかったが、「だから俺は頑張れるんだ」と思えるものをたくさんもらった場所。「これ以上、辛いことはきつとない」と思えた時間。その後の人生は、全てこの2年間に支えられた。

だから——と言ってしまおうと安易に聞こえるだろうが——今では僕はブラジルが好きだ。

2年に一度、ブラジルに足を踏み入れないと僕が持っている永住権が失効してしまうため、僕は今でも2年に一度は必ずブラジルへ足を運ぶ。ちなみに、この永住権は、留学した当時のブラ

ジルでは外国籍選手が試合に出場するために必要だったから取得したものだ。カズも同じように持っていて、僕と同じように最低でも2年に一度はブラジルを訪れている。

そういう事情もあって、僕はかれこれ十数回、ブラジルを訪れているが、その度に「自分はやっぱりブラジルが好きなんだな」と気づかされる。

いろんな国のサッカーを観るようになった今も、どの国のサッカーを一番熱く語るかと言えばやっぱりブラジルだし、クラブワールドカップでもブラジルのチームが出場していれば、迷うことなく勝利を期待する。

マンチェスター・ユナイテッドも、バルセロナのサッカーも素晴らしいと思っているのに、ブラジルのチームと対戦するとなれば冷静さを失い、「ブラジルには勝てないだろう」などとかなり偏った見方をすることもある。当時のような「ブラジル嫌い」な自分も、もはや、いない。極端な話、明日にもブラジルへ行きたいくらいだ。それは、今のブラジルに日本人である僕を見つけて、空手の真似をして「アチャー」とからかったり、「ナカシマ！ ナカシマ！」と呼ぶブラジル人はもういないから、というのもあるだろう。当時、ブラジルにおける日本人の代名詞は空手やF1でしかなかったが、今は違う。カズのおかげで「サッカー」もその一つになったのだ。その証拠に、ここ最近ではブラジルの海辺を散歩していると、その辺りにいるブラジル人が、決まって日本人である僕をからかってくる。

「カズー！ カズー！」

とても心地の良い響きだ。

ブラジルでの挫折があったからこそ

今振り返っても「悔いがない毎日だった」とは決して言えない2年間だった。もつと言葉を覚えたかった。もつと友だちを作りたかった。もつと学びたかった。もつと、もつと……今だからこそ、いろんな思いが脳裏を過る。帰国後、現役生活を送る中でも「もし今のメンタリテイでブラジルに留学していたら、もつと巧くなれたかもしれない」と思ったことは何度もある。日本に戻ってプロを経験した自分がブラジルに行つたなら、きつともつと多くを吸収できただろうし、もう少ししまとめに戦うこともできただろう。もしかしたらカズのように活躍できたかもしれない。だが、それは今だから言える「たら、れば」で、僕にはそれができなかつたというのが現実だ。当時の僕はその全てを拒んでいた。ブラジルに留学していながら心を開けなかつた。ブラジルを受け入れようとしなかつた。そして何より、そんな自分が嫌いだつた。オーブンマインドで仲間を作れず、現実を受け入れられず、自ら孤独を選んで暗く戦っていた自分が、だ。

ただ、そうした後悔の思いがある一方で胸を張れることもある。それはもしブラジルでの2年間がなければ、日本代表になることも、38歳まで現役を続けることもできなかつたはずだということだ。また、サッカーがとてつもなく好きで、サッカーがなければ生きていけないと言いきれる自分があるのも、ブラジルでの挫折があったからだと思う。

だからこそ僕は、それほどブラジルが好きになった今も、ブラジルで味わつた多くの挫折から

目を逸らしてはいけないのだと思う。ブラジルで成功しなかったからこそ、今の自分があるのだから。

結局、僕はブラジルで永住権こそ取得したが、一度も公式戦に出場することができないまま、20歳で日本への帰国を決意した。ブラジルに残ろうと思えば残れただろうし、実際、ブラジルのあるクラブの役員から「うちのクラブでプロにならないか？」と声を掛けられたりもした。

なぜ、ブラジルで1試合も公式戦に出場できなかった僕が誘われたのか？ それは、カズより1年早くブラジルに渡った親父が、「ブラジルサッカー界で知らない人はいない」というくらい有名になっていたからだ。おそらく、僕を誘ってくれた役員も、僕をチームに入れることで親父との関係が深まり、何らかのメリットが生まれると考えたのだろう。

だが僕は、本当に自分の力を認めてもらったわけではないのに、名前だけのプロにはなりたくなかった。だからこそ、その誘いをその場で断り、帰国を決めた。そんな僕に対して、親父は真顔で二つのことを教えてくれたものだ。

「ヤス、よく聞け。世の中に女は星の数ほどいるんだ。お前がこれまで知り合った人数なんて、その中のほんの数人に過ぎない。だから、いろんな女を見て、これだ！ という奴と結婚しろ！」

もう一つはお金のことだ。

「お前は親友に、もし『保証人になってくれ』と頼まれたどうする？」と親父。少し考えたのち、

僕が親友の顔を思い浮かべながら「なってやるよ！」と答えると親父はこう返してきた。

「ダメだ！ いいか、そう言われた時は、自分が渡せる範囲の有り金を全部『返さなくてもいいから！』と言って、そいつにくれてやれ！ でも保証人にだけはなるな！」

考えたら、この二つのアドバイスは親父が初めて僕に掛けてくれた、親らしい言葉だったかもしれない。いや、親父は僕たち兄弟が子どもの頃、宿題こそ教えてくれなかったが、この二つのアドバイスに代表されるように、いつも身を以て「男としての生き方」、世の中で生きる術を教えてくれたような気もする。

ところで、あれから何十年も経ち、僕が当時の親父の年齢くらいになった頃、親父が僕にこんな相談をしてきた。

「ヤス、保証人になつてくれ」

悩んだが、親父だから、しようがない……。

三浦兄弟 三浦泰年著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,365 円（税込）
ISBN 978-4-7976-7207-7

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ!](#)